

【創立記念講演会】

がん哲学の源流〜内村鑑三と新渡戸稲造

「〜新渡戸稲造外来の時代の到来」

樋野 興夫

はじめに

札幌独立キリスト教会 創立一三三周年記念講演会
会で、記念講演「がん哲学の源流〜内村鑑三と新渡戸稲造」の機会が与えられた。札幌独立キリスト教会は、「Boys, be ambitious!」の言葉で知られている、札幌農学校の初代「教頭」のクラーク博士の教えを受けた一期生、二期生の「大島正健、内村鑑三、宮部金吾、新渡戸稲造」らによって創立されたものである。源流・原点回帰の学びである。

今、ふたたび 内村鑑三と新渡戸稲造！

「泣くのに時があり、ほほえむのに時がある。嘆くのに時があり、踊るのに時がある」。人間は、自分では「希望のない状況」であると思ったとしても、「人生の方からは期待されている存在」であると実感する深い学びの時が与えられている。その時、「その人らしいものが発動」してくるであろう。「希望」は、「明日が世界の終わりでも、私は今日りんごの木を植える」行為を起こすものであろう。

学者の風貌

国手とは「国を医する名手の意」、名医また医師の敬称とあり、「医師は直接、間接に、国家の命運を担うと思うべし」とのことである。医師の地上的使命と同時に『日本の傷を医す者』「矢内原忠雄（二八九三〜一九六一年）・一九四五年一月二三日の講演」が蘇った。政治家にして医師のセンスを兼ね備えるのは至難のことである。しかしその稀有

の例が過去の日本にもいた。岩手県が生んだ後藤新平（一八五七〜一九二九年）である。一八八二年、岐阜で暴漢に襲われ負傷した板垣退助を医師として手当し、板垣退助に「医者にしておくには惜しい。政治家になれば、かなりのものになるであろうに」と言わしめた後藤新平は実際、関東大震災後の東京復興の壮大なビジョンを描いたリーダーとして「理想郷を作りたいと願う熱い思い」を持ち「行動する人間」であったとのことである。後藤新平は、同じく岩手県の生んだ新渡戸稲造をいろいろな局面で抜擢した人物でもある。

すべての始まりは「人材」である。行動への意識の根源と原動力をもち、「はしるべき行程」と「見据える勇氣」、そして世界の動向を見極めつつ、高らかに理念を語る「小国の大人物」出でよ！一八六〇年代遣米使節団が、ニューヨークのプロードウエイを行進した。彼らの行進を見物した詩人ホイットマンは、印象を「考え深げな黙想と真摯な魂

と輝く目」と表現している。この風貌こそ、現代に求められる「学者の風貌」でなかるうか。

二一世紀の知的協力委員会

「日本国のあるべき姿」として「日本肝臟論」を展開している。毎日新聞（二〇一五年一月一日付夕刊）の二面に、大きな記事（<http://mainichi.jp/articles/20151211/dde/012/040/008000c>）が掲載されていた。

人間の身体と臓器、組織、細胞の役割分担とお互いの非連続性の中の連続性、そして、傷害時における全体的な「いたわり」の理解は、世界、国家、民族、人間の在り方への深い洞察へと誘うのであろう。かつて新渡戸稲造は国際連盟事務次長時代に、「知的協力委員会」を構成し知的対話を行った。そのメンバーの中には、当時の最高の頭脳を代表するアインシュタイン、キュリー夫人もいたことは特記すべきことである。今こそ国際貢献として「二一世紀の知

的協力委員会」の再興の時である。

(1) 賢明な寛容さ (THE WISE PATIENCE)

(2) 行動より大切な静思 (CONTEMPLATION

BEYOND ACTION)

(3) 紛争や勝利より大切な理念 (VISION BEYOND

CONFLICT AND SUCCESS)

(4) 実例と実行 (EXAMPLE AND OWN ACTION)

(随想 未来へのかけ橋〜今も生きている新渡戸稲造の世界〜原田明夫著より)

人生邂逅の三大法則

二〇〇七年から始まった読書会は早八年目を迎えた。新渡戸稲造の『武士道』(一九〇〇年)(岩波文庫、矢内原忠雄訳)は三巡目であり、現在は、内村鑑三(一八六一〜一九三〇)の『代表的日本人』

(一九〇八年)(岩波文庫、鈴木範久訳)と『後世への最大遺物〜デンマーク国の話』(岩波文庫、内村鑑三著)も、加えて交互に学んでいる。二十世紀

の初めに、共に英語で書かれているところに、「新渡戸稲造・内村鑑三」のスケールの大きさがうかがい知れよう。まさに、「人生邂逅の三大法則〜良い先生、良い友、良い読書〜」の実感である。「出会い」による「ぶれぬ大局観の獲得」である。『東久留米がん哲学外来カフェ』も二〇〇八年から開始している(共に、www.ganteisugaku.orgのトップページ参照)。継続の『心得と胆力』を、思うこの頃である。「源泉を忘れて、末にのみ、くんでいる。なぜ、さかのぼって歴史を太く流れつつある一大生命の源をきわめんとせぬのであるか」(内村鑑三著『ロマ書の研究』)の現代への警告が甦る。「最も必要なことは、常に志を忘れないように心にかけて記憶することである」(新渡戸稲造)。「本流」vs「主流」の違いを静思する時でもある。

「がん哲学」&「がん哲学外来」

「がん哲学」とは、戦後初代東大総長の南原

繁（一八八九—一九七四）の政治哲学と、元癌研所長で東大教授であった吉田富三（一九〇三—一九七三）のがん学をドッキングさせたもので、「がん哲学Ⅱ生物学の法則十人間学の法則」である。「がん哲学外来」は、生きることの根源的な意味を考えようとする患者と、がん細胞の発生と成長に哲学的な意味を見出そうとする病理学者の出会いの場でもある。

『電子計算機時代だ、宇宙時代だ』と試みて、人間の身体のできと、その心情の動きとは、昔も今も変わってはいないのである。超近代的で合理的といわれる人でも、病気になるって自分の死を考えさせられる時になると、太古の人間にかえる。その医師に訴え、医師を見つめる目つきは、超近代的でも合理的でもなくなる。静かで、淋しく、哀れな、昔ながらの一個の人間にかえるのである。その時の救いは、頼りになる良医が側にいてくれることである』（吉田富三）。その時に何が大切な。「暇げな風貌」と、

「偉大なるお節介」ではなかるうか。忙しい人には心を開けない。人間というのはお節介をやいてもらいたい生物でもある。でも「余計なお節介」は嫌である。要するに、「偉大なるお節介」とは、他人の必要に共感することであり、「余計なお節介」と、「偉大なるお節介」の微妙な違いとその是非の考察がこれからの大きな課題となる。また、他の人々に注意を向けるには、「暇げな風貌」が必要ではなかるうか。現代に求められるのは、「暇げな風貌」と「偉大なるお節介」であると感ずる今日この頃である。「暇げな風貌」と「偉大なるお節介」は、悠々と謙虚を生むことであろう。

まさに「風貌を見て、心まで診るⅡ病理学」の時代的到來であろう。「病理学Ⅱ理論的根底」の懐の深さを感じず。「進歩と保守の一致する所、旧と新との融合する所、そこに真醇なるものが生起する」（内村鑑三）に、「病理学の健全性」を感ずるのは筆者のみであろうか。

「偉大なるお節介症候群」

「偉大なるお節介症候群」認定証（樋野KANZO倶楽部） & 「新渡戸稲造学校」発行）をさりげなく浸透させることが、「今、ふたたび 新渡戸稲造！」の根拠であろう。

「偉大なるお節介症候群」の診断基準は

(1) 暇げな風貌

(2) 偉大なるお節介

(3) 速効性と英断
である。

「がん医療とがん研究の目的」とは、「人の体に巣食ったがん細胞に介入し、その人の死期を再び未確定の後方に追いやり、死を忘却させる方法を成就する」ことであろう。目の前にきたがん患者が、そのがんでは死なない。これが「がんの治療の目的」と考える。「がんと共存」(天寿がんの実現)でもある。しかし、「人は最後に死ぬという大事な仕事」が残っ

ている。今日の「日本国に課せられた使命」内村鑑三 & 新渡戸稲造の後世への最大遺物」は、人類の共通のテーマである「医療」を通して具現化されよう。

初期化と癌化

二〇一二年のノーベル医学生理学賞は「成熟細胞が初期化され多能性をもつことの発見」で山中伸弥教授(京都大学)とガードン教授(英ケンブリッジ大学)に贈られた。「初期化と癌化」は、これからの「医学・医療」の大きなテーマの一つである。

日本国は「化学発がんの創始国」であり、山極勝三郎(一八六三〜一九三〇年)と吉田富三が築いた「癌化の本流」がある。山極勝三郎の「発癌の形成的刺激」、吉田富三の「癌の良性化」の命題は、「昔の命題であり、今日の命題でもあり、将来の命題でもある」と考える。「本流の継承」である。

「癌細胞の良性化」(吉田富三)、「癌細胞のリハビリテーション」(Krudson)もips細胞を用いるこ

とよつて、具象化され実現化される様相を呈してきた。「Ips細胞と癌細胞」は対極に位置する楕円形の二つの中心点の如きで「癌細胞はリセットされる」という命題がスローガンとして提唱される時代到来と考へる。その可能性については、既に一九六〇年代のMcKinellによる「カエルの腎細胞癌の核移植によるオタマジャクシの作製」がある。癌細胞に生じた様々な異常をリプログラムし、人為的に遺伝子発現を制御することを基盤とする治療を追求することが現実的に可能になつてきたと言える。今後の癌がん研究の大きなツールとならう。まさに、「癌細胞で起こることは、人間社会でも起こる」人生もリセットされる」であり「人類の夢と希望」を与えるものである。

「潜在的な需要の発掘」と「問題の設定」を提示し、新しい事にも自分の知らない事にも謙虚で、常に前に向かつて、時代の要請感のある「新鮮なインパクト」を与える「広々とした病理・腫瘍学の本流」を目

指したいものである。「生物学の法則十人間学の法則」は「がん哲学」の根拠であり、「人生のリセット」は「がん哲学外来」における基本姿勢でもある。

内村鑑三と新渡戸稲造外来の時代の到来

「目的は高い理想に置き、それに到達する道は臨機応変に取るべし」(新渡戸稲造)、「古いものには、まだ再活用される要素があるのである」(内村鑑三)の教訓が今に生きる。「責務を希望の後に廻さない、愛の生みたる不屈の気性」が「人生の扇の要」の如く甦る。「人生は短し、真理は長し」(内村鑑三)の言葉が、現代社会に生きる「叡智」として身にしみる今日、この頃である。「ビジョン」は人知・思いを超えて進展することを痛感する日々である。ささやかな「復興の業」となれば幸いである。「自分の命より大切なものがある」は、「役割意識&使命感」の自覚へと導く。ここに「内村鑑三&新渡戸稲造外来の時代的要請」があらう。まさに「人生の目的は

品性の完成なり」の模範である。

ラジオ日経の「樋野興夫・日曜患者学校（「がん哲学学校」）（<http://www.radiokkai.jp/inochi/post75.html>）の番組の取材があり、出席の患者の皆様とクリスマスケーキを、食べながら、今年の想い出を語らった。中学生による『The Future Talk (TFT)』第二回「いのちを見つめる哲学対話」（http://utcp.c.u-tokyo.ac.jp/events/2016/01/the_future_talk_tft/）（東大駒場キャンパスに於いて）が企画されることである。東京大学駒場キャンパスにある「共生のための国際哲学研究センター（UTCP University of Tokyo Center for Philosophy）」では「Philosophy for Everyone（哲学をすべての人に）」というプロジェクトで、学校や地域コミュニティなどで哲学対話の活動を行っています。UTCPでも応援し、The Future Talkというシリーズ企画として実現しました。テーマは「命について見つめる」ということで、

中高生をはじめ多くの人と対話をするというイベントになりました。「がん哲学外来」という独自の活動を続けておられる先生と直接語り合えるのは、中高生のみならず、私たち大人にとっても、たいへん貴重な機会であり、わたしとしても心より嬉しく思いますので、どうぞよろしく願います、とのことである。さりげなく、『今、ふたたび 内村鑑三 & 新渡戸稲造』の時代到来を『教育』に感ずる。

早速、『どうぞあらゆる分野で「冷凍」気配の時代に、火を興し続けてください』の激励を頂いた。「われ origin of fire たらんぐがん哲学余話」である。

